

1P55

自閉症スペクトラム児の療育における保育者の関わり —「とことん付き合う」支援の意義と拡がりの検討—

平田 香奈子

広島修道大学 人文学部

早期療育が生涯に及ぼす影響の大きさから、障害のある子どもへの発達援助の在り方が注目されている。本研究では、自閉症スペクトラムをもつA児について、担当保育者からの聞き取りにより収集した保育施設在籍時のエピソードと、学校生活への参加観察により得た小学校2年生時のエピソードを整理し、幼児期の療育施設における保育者の関わりの意義と、就学後の育ちの姿としての拡がりを検討した。そのうえで、生涯発達を見据えた自閉症スペクトラム児の発達援助の視点について、知見を得ることを目的とした。

本研究の遂行にあたり、A児および保護者、療育施設職員、学校関係者より同意を得た。

A児は年中時、通園バスへの乗車拒否や設定保育への参加の拒否等、集団に参加できない姿が目立った。担当保育者は「とことん付き合った」と当時の支援を表現した。具体的な方法として、「荒れた姿が見られる際も、思いを聞く」「無理強いせず、誘う時でもできそうな方法を本人と話し、探る」などが挙げられた。このような日々を経て年長の秋の運動会には、A児は緊張しつつも頑張る姿を見てほしいとやりきり、卒園前にはクラスの係活動にも主体的に取り組むようになった。

就学後、A児は在籍する特別支援学級、交流学級と、所属する集団・人間関係が多様化し、A児の意思と異なる活動への参加が求められることも増えた。2年生の5月の運動会練習では、頑張りたい姿の一方で、逃避を図る姿もあった。しかし、交流学級の担任教諭や児童から認められる経験、係活動を共に行う経験を通じ、1月には交流学級での係の役割を主体的に行うようになった。

別府（2016）は、自閉症スペクトラム児の世界観が尊重されずに他者からの関わりがもたらされることは、当事者と周囲の大人との関係を遮断することになりかねないと指摘している。また本田（2016）は、早期療育において安心できる環境の保障が必要であり、それを基盤に学びが成立すると述べる。そしてその鍵は、自分にできることや嫌なことを判断できること、できないことを相談し、手伝ってもらえるスキルであるとした。「とことん付き合う」支援は、A児の世界の尊重と他者への信頼、学びの基盤となる安心できる環境をもたらした。さらに、信頼を基盤として共に方略を探った支援は、相談する経験や好き嫌いを判断する経験となり、就学後の周囲との協働や、苦手なことに向かっていく姿に繋がったと考えられる。

1P56

保健室を利用している高校生の「発達障害困り感」と「支援ニーズの高さ」との関連

日下 虎太郎¹、橋本 創一²、秋山 千枝子³、
田口 禎子⁴、町田 唯香⁵

¹東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科

²東京学芸大学 特別支援教育・教育臨床サポートセンター

³あきやま子どもクリニック

⁴駒沢女子短期大学

⁵東京学芸大学大学院 教育学研究科

【1.問題と目的】

高校生の不登校・学校不適応は軒並み増加しており、依然として深刻な状況にある（文部科学省，2019）。高校生の年代は心身ともに大きな変化を経験する時期であり、とりわけこの時期の発達障害のある生徒は自己評価の低下とともに情緒的に不安定になり二次障害に発展する可能性が指摘されている。一方で、特別支援教育を必要とする生徒が年々増加していること（文部科学省，2017）を踏まえると、メンタルヘルスの問題の背景に発達障害に起因する困り感を捉えて支援していく姿勢が一層求められている。しかしながら、高校生を対象として「発達障害困り感」や支援ニーズとの関連について調査した研究はほとんど見当たらない。そこで、本研究は養護教諭への質問紙調査により保健室を利用している生徒の発達障害困り感および支援ニーズの高さとの関連を検討することを通して、メンタルヘルス上の課題を抱えている高校生についての資料を提供することを目的とする。

【2.方法】

2019年7月～8月、首都圏の養護教諭に質問紙調査を行った（204名、回収率40.8%）。支援ニーズの高い生徒と低い生徒を1人ずつ抽出してもらい「発達障害困り感に関するチェックリスト」に5段階で評価してもらった。調査対象校の学校長・養護教諭に調査目的と手続き、回答の自由、匿名性の担保などの倫理的配慮事項について書面にて説明し、回答を以って同意を得た。なお本研究は東京学芸大学研究倫理委員会の承認を得ている（受付番号151）。

【3.結果と考察】

発達障害困り感チェックリストの因子分析の結果、ASD困り感因子とADHD困り感因子の2因子構造であった。因子得点によるクラスター分析の結果、4つのクラスターが得られた（ASD傾向、ADHD傾向、併存傾向、メンタルヘルス不調）。対応のない検定の結果、支援ニーズが高い生徒の方が発達障害困り感が大きいことが示唆された（ $t(371) = 5.43$, $p < .001$ ）。また、ASDとADHDの困り感がともに高い「併存群」では支援ニーズの高い生徒が多く、ともに低い「メンタルヘルス不調群」では支援ニーズの低い生徒が多かった。発達障害困り感の大きい生徒ほど重大な問題に発展しやすい傾向があることが推測できる。

メンタルヘルスの課題を抱えて保健室に来室する生徒に対して「発達障害困り感」という視点を持って対応することは、問題の深刻化を防ぐ糸口になるだろう。